

「米軍再編」と沖縄 対論

藤本幸久／本橋哲也

中川 本日は沖縄からの緊急報告として、現在進行しています米軍再編問題をにらんで「Marines Go Home」の上映会を急遽決めました。今日は「Marines Go Home」の監督、藤本幸久さんをお迎えして、報告者として本橋哲也さん、コメンテーターとして友田義行さん、萩原一哉さんで沖縄を採り上げたいと思います。周縁化する、周縁化されるという言辞の中に私たちの内なる周縁化、内なる疎外の問題が含みこまれていると思います。今日の映画を通じて現在行われている、まさしく日本とアメリカが行使する不正を見つめていきたいと思います。それでは司会の崎山さんからお願いします。

崎山 本日は「Marines Go Home」の上映のもとに現在の沖縄のこと、映像としてのあり方も含めてシンポジウムを開きたいと思います。6月2日、日本がODAで、3隻の巡視艇をインドネシアに供与したことが読売新聞や北海道新聞で報道されました。ODAで今現在、日本が持っている大綱からしてみても、反テロとか平和構築という言い分が入っています。しかし、武器を供与することはODAに反する。国連のもとでも経済援助に限るということが完全に踏みにじられる状況になっています。憲法改悪に向けたさまざまな動きが進んでいます。教育基本法の改悪、共謀罪にしても日々、苦しい思いをせざるをえなくなっているわけですが、その際にこのODAの供与に表れているような戦争の条件が全社会化してしまっている点に目を向けないわけにはいきません。ODAが経済のことだけではなくなくなってしまっているこの事実を僕らはどのように考えるかということが、本日、話し合う内容のポイントのひとつになるかと思います。

もう1点、憲法改悪をめぐる話ですが、日本国憲法は確かに平和憲法としての力を持っていると私自身も思いますが、一方で日本国憲法が制定されたプロセスを見ていくと沖縄が完全に振り捨てられていたことを我々はきちんと考えるべきものがあるかと思っています。日本国憲法が制定された時、発布された時、沖縄は日本の固有領土ではないからとして、昭和天皇が延命、助命のために切り捨てられ、沖縄が日本の中にあるかどうかという、また別の問題が存在していることがあるわけですが、現在進んでいる憲法改悪に対して我々がその問題を考え、批判していく際に沖縄は日本国憲法の中に書かれているか。歴史学者の鹿野政直さんの言葉をパラフレーズすれば、「沖縄は入っているか」ということを、我々は、今深くきちんと考えなければいけないのではないかと思っています。

本日、上映します映画は2時間11分の長い作品ですが、力のある作品だと思います。「Marines Go Home」を通して我々が今生きている、この世界はどういう世界なのか、我々がそこに表れる強大なメカニズムに対してどのように批判的に解明することができるのかということとを皆さんとともに論じていきたいと思っています。皆さん方の積極的なご発言をお願いしたいと

思います。

本橋 私が聞き手になりまして、「Marines Go Home」の監督である藤本さんからお話を伺えればと思います。

沖縄の闘いを描いた映画はたくさんあるわけですが、特に皆さんがすぐに思い浮かべられると思われるのは高岩仁さんの「教えられなかった戦争」のシリーズ5部作のうち3作目が沖縄編で、阿波根昌鴻さんの「伊江島の闘い」を記録した映像です。このシリーズ第一作は1992年の「侵略・マレー半島」で、日本のドキュメンタリー映画史上に残る名作ですが、実は高岩仁さんと共同演出されたのがほかならぬ藤本さんと恥ずかしながらつい先程知りました（笑）。それからこれは最近ですが、沖縄で映画をたくさん撮られている西山正啓さんが「ぬちどう魂の声」をつくられています。「梅香里」と「辺野古」を結んだのは藤本さんと同じですが、西山さんの場合は大分県日出生台を加えて3つの場所を結ぶ映画をつくられています。

最初に藤本さんに映画の作り方についてお聞きしてみたいと思います。高岩さんがつくられた5作の映画「教えられなかった戦争」もそうですが、今日の映画も映像が実にきれいで、その点でまったく妥協がない。「Marines Go Home」ではとくに時間の流れがのんびりしていて、動物の映像、風、人々の表情がそのゆったりした時間の中で自然に生きている。高岩さんの映画は米軍基地の飛行機まで美しく撮れていたり、基地の金網さえもが美しい。「Marines Go Home」も鷹揚とした時間の流れのなかで人々の表情とか、チョン・マンギュさんのおつれあいのソングジャさんのような人々の顔や、日常生活を生きている人や風物が大切にされている映画だなと感じました。

藤本 僕は今、北海道に住んでいます。北海道は座布団みたいな形をしています。その丁度真ん中に大雪山国立公園があります。その麓の町、新得という小さな町で、札幌から列車に乗ると帯広とか釧路に行く列車が峠を超える。狩勝峠を超えたすぐの町に12年前から住んでいます。高岩仁監督と共同監督した「教えられなかった戦争—侵略・マレー半島」という映画をつくって上映会をしようと。北からやろうと北海道に行きました。鞆一つ持ってフィルムを持って北海道に行ったんです。札幌とか小樽、函館、旭川とか行って、途中で「東京に帰らなくてもいいや」と思って、そのまま仲良くなった人に「どこか住める家とかないですかね」と。そこで映画をつくる条件をつくりながら映画をつくっていかうと思ったんです。もう一つは1988年、アフガニスタンに半年くらいいました。丁度、1979年からソ連がアフガニスタンに軍事介入するんですが、10年間軍事介入を続けてへとへとになって引き上げていく時期、その後に行ったんですが、そこで行われている戦争をいろいろ見て、自分たちは、侵略をしない、ある場所の中で人間らしく生きていくことをつくっていかないと、「戦争がどんなにひどいかと言ってもあかんあ」と、だんだん思うようになって、そういう地域で、そういう生き方をしていく、自分もかかわっていきながら映画をつくっていきたいなど。東京に帰らずにそのまま北海道に残りました。そういうところで映画をつくり始めたんです。

本当に隣まで500メートルぐらい離れていて、人に会わない日もよくあるんですね。春になると牧草地に住んでいるので、鹿が山ほど出てきて、夜帰ると霧の中に鹿がいっぱいいる、きれ

いな場所に住んでいます。そんなところに住んでいるので、テーマでビシビシやっていく映画ではなく、違う映画をつくりたいなと思っていて、そういうところが関係しているのかなと思ったりしています。

本橋 映画で扱われている主題や場所は軍事的、経済的、政治的には深刻な状況にある。ところがその現場を撮った映画では闘いよりもむしろ平和な情景が描かれている。それがかえって我々自身が見ている場所の暴力を際立たせる、見ている我々自身の想像力が試されていくということではないかと思います。映画にも出てきた辺野古の平良夏芽さんがおっしゃっていますが、「確かにジュゴンも大事だし、ヤンバルの自然を守りたい。でもジュゴンやヤンバルの自然を守るためだけだったら命をかけられない」とおっしゃる。命をかけられるのはなぜか。新しい基地ができれば、現在も沖縄から出撃するヘリコプターや、ここで訓練された海兵隊が実際に今でもイラクで人を殺しているわけだし、基地ができればもっと多くの米兵が沖縄からでかけて行って殺人を犯す。そのことを考えるから本当に命をかけても止めなくてはならないと思う、と。富田晋さんとか、そこで一緒に座り込んで活動している人たちはみな同じ思いなのでしょう。

普通、我々は「演習」と言いますが、英語だとミリタリー・エクササイズ、つまり軍事の訓練をしているわけです。チョン・マンギユさんも言うように練習だから実弾ではないけども、それが実際になると弾頭に劣化ウラン弾が使われていて、それが人を殺すだけではなく、莫大な被害を未来永劫与えていく。そこでやっているのは人殺しの練習で、その結果確実に人が殺されていく。さらに問題は沖縄でも梅香里でも「演習」そのものによって人が殺されていることです。訓練中の兵隊たちによって人々の生活が脅かされ、少女たちが暴行されている。多分、この映画が練習という言葉を使いながらもその先にあること、現在でも「演習」という暴力が遂行されており、そこに我々の税金が使われている、その現実に対する我々自身の想像力が試されているなと思いました。

藤本 今回、3つの場所を描いて、現地の人たちと話をしている、私達と一番違うのは想像力ということですね。たとえば辺野古のおばあたちは、今度のイラクの戦争が始まる半年前から「これはイラクで戦争が起こる」とずっと言っていたんですね。それはなぜか。本当に実弾を使った演習が激しくなっていたらしいんですね。僕たちはその頃、何とかイラクの戦争を止められないかということで、デモをしたり、心を痛めたりしていたと思いますが、辺野古のおばあたちは「絶対にアメリカは戦争をやる。そのための訓練をしていると見てた」というんですね。その違いがすごく大きいなと。

韓国のチョン・マンギユさんも「その向こうにイラクの町や人やアフガニスタンの町や人が二重映しになっているように思った」。実際にそこに同じものを見ても、その向こうにイラクやアフガニスタンの人々の姿が見えているところが違うなと思いました。それは戦争って「アメリカが」とか「日本が」とか言いますが、実際に戦争をするのは人間ですよ。とりわけその国の若い人たちです。よくわかるんですね。沖縄にいと海兵隊員の姿を見かけることもあるし、たむろしている場所に行くこともあります。そこで見かけるのは皆、皆さんと同じ、もっ

と若い20歳くらいのアメリカの普通の若者ですよ。みんな鬼のような顔をしていない。普通の若者です。半年前までは戦争と縁もゆかりもない。半年前に海兵隊に志願して半年間、沖縄で人を殺せるようになるまで徹底的に訓練されて、イラクに行って何万人と殺して、自分たちも何千人と殺される若者たちです。基地の向こうにいる人間たちがそのように強いられているのだということについて、おばあち、韓国のチョンさんたちがリアルに感じているということなんだろうなと思いました。

本橋 映像の中でも去年、梅香里の射爆場が閉鎖されたおりに、爆撃されていた島に皆さんが行かれて、そこで射撃の目標になった車や地面の情景が出てきます。それがアフガニスタンやイラクの情景と重なって、私たちにはどうしても見えてしまう。映画の最初に矢白別の川瀬汎二さんが自分のドームの屋根に書かれた日本国憲法が大写しにされるわけです。日本国憲法はいろんな意味で我々の想像力をかき立てる事象で、一つには日本国憲法の前文と憲法第9条がセットになっているということがある。前文には、我々は「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して」とある。つまり「これから自分たちは平和を築いていくけれど、しかし自分だけでは平和は築けない。でも我々がまず武器を捨てれば諸国民も我々を信頼してくれるから、だからまず自分たちが武器を放棄することによって諸国民の信頼を得よう」と。相互的な連帯の精神があるわけですよ。憲法第9条だけで、一方的に戦争放棄して軍隊は不所持と考えるから「日本の安全は守れない」という発想が出てくるのだけれど、あれは前文があって、まず諸国民の信頼を得て、相互的な平和、信頼関係を築いていくためには、まず我々が武器を放棄すべきという発想ですね。今でも日本になんで米軍基地が必要かと問われると、必ず「北朝鮮の脅威」というのが挙がる。北朝鮮がなぜミサイルを発射したりして自分を「脅威」として見せようとするのかは、そう振舞わざるを得ない東アジアの政治構造があるからです。そこには端的に言って、日本の植民地支配責任の未了と日米軍事同盟がある。少なくとも日朝国交正常化をして、平和条約をきちっと結ぶ。朝鮮半島は現在も休戦状態にあるわけですが、朝鮮戦争を終わらせるということに日本が大きな役割を担うべきだし、何よりもまず脱植民地化という自分たちの責任を果たして初めて「北朝鮮の脅威」ということも冷静に考えられるはずですよ。米軍基地と北朝鮮との関係ということを我々自身が正確に歴史認識の問題として考えていかなければいけないと思います。

藤本 僕の場合、ジャーナリストのように映画で分析するより、どういうふうに映画をつくるかということだと思います。僕の最初の監督作品は「教えられなかった戦争—侵略・マレー半島」という映画で、そこで日本の兵隊たちがどんなことをしたのかをたどることになるわけですが、一番ショックだったのは、背中に何か所も日本の兵隊に刺された傷のある人が何人も生きてることなんですよ。僕が行ったのは1991、92年ですから戦争が終わってから40数年たっているんですが、その人たちは今、50歳代くらいで、その時は、ほんと子どもですよ。4歳、5歳、6歳、9歳とか。10歳にもならないような人たちが、同じように背中から刺された傷を持って、生きて自分の目の前に立っているということですよ。「何も片づいてないな、きちんと片づけてないな」と思うんですよ。日本の兵隊が、戦闘が終わってから占領時代の初期

に10万人くらいのマレーシア、シンガポールの人たちを殺したとされています。イラクのファルージャでは、沖縄の海兵隊が主力になって町を取り囲んで、中に武装勢力がいるということで、抵抗する武装勢力を全部やっつけるという作戦で、数千人のイラクの人たちが殺されたと言われています。それと同じことを日本の軍隊もやったんですね。シンガポールとか、町を取り囲んで怪しいと思うものを全部殺していく。ジャングルの中で何百人か住んでいる小さい村があるんです。そういうところにも武装勢力がいるということで、夜中に、未明にそこの村人を全員殺していく。そういう中で子どもたちも一緒に刺されたんですね。でも生き残った生命力の強い、急所を外れた人たちが、何人かずつ、村の中で生き残って、今もいて。どういうことをしたのかということが問われるわけですよね。

日本政府がしたことは何か。そういうことが問題になった時、政府同士で手打ちをしたんですよ。マレーシア政府とシンガポール政府にも、それを解決するために賠償しようと、それぞれに5,000トンの船を1隻ずつ渡して、そのことは済んだことにしようとしたんですね。それですべてなんです。ほんとに戦争でいろいろあったことがきちんと解決されていないままなんです。ペナンという今、リゾートになっている美しい町の中学に行きました。そこも反日勢力の拠点だということで中学の先生と中学生たち40人くらいが殺された場所です。その先生だった人の奥さんにお目にかかることができました。結局、お目にかかれなかったんですが。それはなぜか。日本人の顔を見られない、見たくない。ようやく50年近く、傷をふさいできたのに、今もう一度、どういう形にしる「日本人と会うのはいやだ」ということができました。「辛い思いをさせたな」という感じがありまして、そういうことが全く投げ出されたまま、60年たってしまったなということが、今のアジアとの関係、未来をつくっていくのに阻害要因になっているなということを実感しています。

本橋 私は大学の教員ですから「分析」的なことをしゃべると（笑）、映画の中の平良悦美さんのきつい言葉が響いてきて「ほんとに大学の人というのは知識ばかりであとは何もないわね」と言われちゃいますね。映画を見ていると、沖縄の人も朝鮮の人も歌や踊りがあって、我々は知識だけであとは空っぽというのは本当だな、と身にしみます。ところで「米軍再編」と言いますね。もちろん大きなまやかしがあって、たとえば海兵隊が3000人、グアムに移駐とか言っていますが、海兵隊が沖縄に何人いるかなんて正確には誰もわかっていない。米軍の自己申告ですから、米軍がそう言う「そうですか」と言うしかない。しかも今回、海兵隊の実践部隊は全部沖縄に残るわけです。グアムの新しい基地をつくるために日本政府、つまり国民の税金で新しい基地をつくってあげて、そこには沖縄からは司令部要員だけが行く。沖縄の負担軽減とか、普天間基地の危険除去ということで、米軍が1960年代から青写真を作っていた新基地が辺野古につくられようとしている。「負担軽減は沖縄の悲願」というのも言葉の詐術ですが、何と言っても最大のまやかしは「米軍再編」で、これは映画でも強調されているように「自衛隊の再編」でもあるわけです。自衛隊が米軍と一緒に戦争をする。現在は平和な日本とか憲法第9条があるとか言いながらも、すでに日本はもちろん交戦状態にある。日本は今、戦争をしている。イラクの自衛隊は幸いなことに人は殺してない、鉄砲も撃っていない、サマワの東京ドームぐらい大きい陣地にこもってマージャンして、空輸した鮫を食べている、他にや

ることがないから。ほとんどの隊員が太って帰って来るそうです。もちろん人を殺すより、マージャンしてくれていた方がいい。しかしそれにしても莫大な国民の税金使ってイラクでマージャンしなくてもよさそうなものですが。彼らはピクニックに行っているわけではなく、戦車持って鉄砲持って行っているわけですから、当然戦争ですよ。日本は戦争をしているわけです。だから自衛隊と呼ばずに明らかに「日本軍」です。それで米軍再編とは米軍に関わることでだけでなく、日本軍を米国中心の世界戦略の中に巻き込むための米軍と日本軍との統合政策です。だからグアムに基地も必要だし、辺野古岬にV字型の新しい滑走路も必要、岩国や座間や日本各地の基地の増強が必要になってくる。こうしたまやかしを、事実を知り伝えることで突いていかないといけなないと思います。

藤本 これをつくり始めた2年前には米軍再編とか辺野古のことが伝えられていなかった。僕も北海道に住んでいますから、皆さんと同じように東京でつくられたニュースを見ている。そうすると辺野古のことなんか全然出ないわけですよ。沖縄ではテレビも頑張っていて、毎日、辺野古でどうなっているかを伝えているんですね。ところが向こうに行ってから聞くと、いくら東京に送っても採り上げてくれないと、NHKとか民放の人たちが言っていました。それなら自分たちでつくろうと、この映画をつくり始めたんです。最近、米軍再編のことも辺野古のことも少し伝えられるようになりましたけど、すごく具合の悪い伝えられ方だなと思っているんですね。

その一番は「沖縄の負担軽減」という言い方ですね。沖縄の負担軽減のために岩国でも千歳とかで米軍を引き受けってくれと、地域で、日本の中で言われていますが、でも、沖縄の人たちは、もともと沖縄は基地なんかなかった島だし、今度、負担軽減と言うけども、普天間の基地はなくなるけど、その前提は辺野古に新しい基地をつくるということですよ。今、普天間は宜野湾という町の真ん中であって、港がないんだけど、今度は辺野古には港もつくりましょ。ほんとうにこれが負担軽減になるんですかと。日本政府は誰にこれを言っているのかということと基地をなくしたいと思っている、本当に減らしたいと思っている人に対して言うんですね。僕は北海道に住んでいます、千歳の人たちに「米軍を受け入れろ、沖縄の負担軽減ですよ」と。それから辺野古、名護市もそうです。名護市や沖縄県知事にも「沖縄の負担軽減をあなたは知事や市長として拒否するんですか？」と再編を受け入れさせていくというふうに使われているんですね。沖縄の負担軽減という言葉が、基地を受け入れさせるために使われていると思われてしょうがありません。

なぜかと言うとアメリカ政府やアメリカ軍は一度も「沖縄の負担軽減のために今回の米軍再編をやっています」とは一度も言ったことはないんです。言っているのは米軍再編というのは次の新しい戦争をどうするかということをやっていると。そのポイントはアメリカの戦死者を減らすことだと。同時にアメリカは経済的にも大変な状態になってきているので、アメリカの財政的な負担を減らす、この二つだと言っています。そのためにどうするか。今度は同盟国に楯になってもらう。その同盟国とはどこか。今、アジアでそれをやってくれるのは日本しかないんですね。「日本がお金も出し、兵隊も出してやっていくんですよ、それが今度の米軍再編ですよ」と。アメリカ政府もアメリカ軍も、そう言っています。これが今回の米軍再編のポイン

トだと思うんですよ。だから今、イラクにいる自衛隊ではダメなんですよ。イラクに行くことはできるけど、手が縛られている。憲法は皆さんも大学で学んだと思いますが、権力や国家が好き放題しないように手を縛っているものですよ。そういうことで武器はあるけど、使えない。本当の軍隊ではない。それを本当の軍隊にしなければ米軍再編は完結しない。憲法改正とセットに出てきているのは、そういうことです。憲法改正してアメリカの同盟軍になって「戦争ができる軍隊になる」ということが、米軍再編の一番大きなことですよ。

本橋 映画のタイトルのことを考えてもいいですか。「Marines Go Home」のホームとは何か？家、故郷とはどこのことか？アメリカの現在の政権、アメリカの軍隊がやろうとしていることが、500年にわたるヨーロッパの近代国民国家の植民地征服の延長線上にあるわけで、植民地主義とはつきつめればどんな場所でもホームにしてしまうことですよ。出かけて行って、その文化や経済や社会構造を破壊して自分たちだけに都合のいいホームを築く。沖縄のような場所は居心地がいいわけですよ。ホーム以上にホームらしい場所、気候もいいし、お金も全然払わないでいい、全部オンブにダッコ。植民地主義があらゆる外地をホームにしていく構造を孕んでいるとすれば、1492年のコロンブス以来、植民地主義の力学をとらえることは「ホーム的帝国主義」を問うことにつながるとも言えると思います。

そこでこの映画のタイトルですが、Marines、海兵隊に帰る場所はないんだと思います。海兵隊が人殺し部隊であるかぎり、彼らにとって帰る場所はどこにもない、そういうことを突きつける映画だし、その意味できわめて痛烈なタイトルだと思うんですよ。もし仮に海兵隊にとって帰るべきホームがあるとすれば、映画の中でも言われていましたが、実は彼ら彼女らは圧倒的に貧しい階級の出身の人が多い。彼ら彼女らが貧しい階級であって、アメリカ合州国の国の中で帰るべきホームがないから外に出てきて、人殺しをせざるをえない。彼らに帰るべき場所があるとすれば、兵隊たちが一人の普通の人間として、まともな生活ができる場所をホームとしてつくるべきでしょう。別にそれがアメリカ合州国である必要はないですが、彼らが自分のホームを自律して築いていけるだけの社会政策なり福祉なりが存在するべきではないでしょうか。海兵隊員にとって帰る場所がない。人間が帰るところがないということが、現代のネオリベリズム支配にもつながる最大の問題だと思います。

そこでもし「Marines Go Home」と言うのであれば、自衛隊にはイラクからカムホームしてもらわないといけない。なぜ海兵隊や自衛隊にとってホームが自分たちの家族や恋人の住む場所ではなく、イラクとか辺野古とか、梅香里でしかないのか？それは自分の帰るべきホームが、自分の国にないからなんですよ。仕事がないから、新自由主義的な経済の中で厳しい生活を強いられているから軍隊にしか行き場所がない。軍隊の海外における暴力を考えることは、とりもなおさず今、我々自身が日本の中で、大学生や若い人たちが直面している労働や就職の問題、「ニート」とか「フリーター」とかひどい差別用語で言われる形でイメージされているような日常の問題を考えることです。まず足元のホームのあり方を変えていかないといけない。それが「Marines Go Home」というときの本当のホーム、自衛隊カムホームというときの「Home」の意味ではないかな、と思いました。

藤本 「Marines Go Home」というタイトルをつけたのは、イラクで戦争に反対する運動をしている人たちが、スローガンの一つに言っているからなんですね。僕は、兵隊をやめてほしい。兵隊ってね、ベトナムに行った海兵隊員で、アレン・ネルソンさんと東京で上映している時、貧乏しているので居候させてもらって同じ家にいたんです。アレンさんは沖縄にも行ったんです。辺野古に行って、阻止行動している人たちがむちゃくちゃやられている。それを見ていたらしい。その時、一昨年のことですが、自分がピストルを探していることに気づいたらしいんです。今、敵と思われる作業員たちを撃ち殺したいと思ったらしい。それで1年くらい落ち込んだらしい。PTSDというのかな、それに苦しめられ続けたいらしい、ベトナムで人を殺したことに。そういう経験をしてほしくないんですよ、本当にそう思います。今いる海兵隊員たちにも、兵隊じゃなくて、そうじゃない生き方を選べるようなチャンスをつくっていかないといけないなと思います。

それで同時に思うのが、自衛隊のことなんですよ。自衛隊は今までは日本国憲法があって、いろんな技術が身につけられた。公務員ですから安定しているところが就職として選べて、今もまだイラクに行っても、人を一人も殺してないような軍隊です。でもね、それは今度、憲法を変えて自衛軍となったら、今のアメリカ兵と同じですよ。人を殺さないといけない。それを拒否できない軍人になるんですね。それを何とかやめさせたい。今、海兵隊はアメリカでは志願制ですが、貧乏な人が多い。イラクの戦争の実情とか知ると、行きたくないという人がいっぱいいる。でも軍隊はそういうことを思ってもやめられない。やめさせてもらえない。軍隊の一番ポイントになることは「命令に従うこと」です。命令を拒否することは軍事裁判にかけられて刑務所に入るしかない。だから今、アメリカの若者たちでイラクに行きたくないと思う人は、逃げるか、「行きたくない」と言って軍事裁判にかけられるか、二つしかない。そういうことを強要されるところが軍隊です。僕は50歳を超えたので、多分、戦争に行かないけど、役に立たないので。若い人たちには、そういうことを、ほんとにやめさせたい。人を殺すことを一生背負っていかないといけないような人間を増やしたくない。兵隊じゃない、軍人じゃない生き方をやっていけるような場所をつくっていかないといけないなと本当に思っています。